

## 「アメリカの世紀」とは何か 紀平英作著『歴史としての「アメリカの世紀」』

(岩波書店、2010年)

有賀夏紀

本書『歴史としての「アメリカの世紀」』は、思索を促す本である。日本のアメリカ史研究第一人者である著者が、「アメリカの世紀」という概念の下に7編の論文を収録し、そこから総合的なアメリカ現代史像を示そうとする。各論文の初出は1981年から2008年にまたがり、題名も含めて大幅な書き直しが行われているが、いずれも一次および二次史料を広範に駆使し、著者独自の解釈を展開する高度に専門的な研究である。したがって、本書は学ぶ史実も多いが、それ以上に、読後にアメリカ史についての深い思索を課せられる。

まず、示唆的な本書の題名『歴史としての「アメリカの世紀」』の意味を考えることから始めたい。この題名はその意味を考えさせずにおかない。しかしまた同時に、読者の関心を誘う書名であることも確かである。「歴史としてのアメリカの世紀」という語句は、ふたつの問題を含んでいるように見える。ひとつは「歴史としての」の意味、もうひとつは「アメリカの世紀」ということばが提起する問題である。後者は本書の主題であるが、これについては、20世紀が終わりに近づく頃から一般メディアや学界において、盛んに議論されてきた。

「歴史としての」は歴史書などの題名によく使用されるようである。アマゾンのサイトでみただけでも、『歴史としての日米安保条約』『歴史としての戦後日本』『歴史としてのベトナム戦争』『歴史としての社会主義』『歴史としての資本主義』等々と、枚挙のいとまがない。これらの中には、本書の著者による『歴史としての核時代』も含まれる。これらが「歴史として」という語句を使うのは、同時代の、あるいは同時代の至近の時間に起こった現在進行中の問題を過去の問題、つまり歴史としてみる場合、あるいはある問題を通時的にみる、つまり何々の歴史という意味でいう場合が多いようである。ちなみに、英語の本の題名ではルイス・ハーレ (Louis J. Halle) の有名な *The Cold War as History* (1967)、邦訳『歴史としての冷戦』(1970)があるが、日本語の「歴史として」の表現に相当する“as history”という語句の使用は多くないようである。ジョン・ルイス・ギャデイスの翻訳書『歴史としての冷戦』の原著の題は *We Now Know: Rethinking Cold War History* (1998) である。

日本の学界や出版界で頻用され、広く受け入れられている用語についてここで詮索するのはいささか脱線になるのかもしれないが、もう少しこの問題に紙面を使いたい。というのは、「アメリカの世紀」を「歴史として」みるということはどういうことなのかという、私が最初に本書を手にしたときに持った疑問を解くことは、著者の主張を理解することにつながらうと思うからである。私は初めこう考えてしまった。「アメリカの世紀」はアメリカ史の中の時間的区分である20世紀を呼ぶひとつの名称であり、20世紀はすでに過ぎた歴史であるから「アメリカの世紀」を歴史としてみるのは当然である、これをあえて「歴

史として」みるというのはどういうことなのかと。この疑問に著者はどう答えているのだろうか。

本書は、20世紀半ばから1960年代にみられた […] 多面的であるアメリカ社会の統合のあり方を、総体として20世紀に特徴的な国民国家の歴史態様と捉え、その状況が出現してくる複雑で蛇行的な経緯を、第一次世界大戦期に始まる政治社会の展開局面に即して明らかにすることを課題とする。その過程で国民形成を牽引した複数の思想がどのようなものであり、それぞれにいかなる論理を含んでいたかに関心を寄せている。(ix-x)

これは「はじめに」からの引用であるが、さらに著者は「アメリカの世紀」について次のように述べる。

第一次世界大戦期から1970年代半ばまでに限れば、世界経済、政治、軍事におけるアメリカの圧倒的影響力はとくに世紀の半ばにおいて顕著であり、この世紀を広く「アメリカの世紀」と呼ぶことはそれなりに首肯されるであろう。(xii)

ここで、「アメリカの世紀」は第一次世界大戦から1970年代半ばに至りアメリカが世界経済、政治、軍事において圧倒的影響力を持った時代、つまり実態をとまなう一つの時代の概念として捉えられている。そして先に引用した「はじめに」で、第一次世界大戦から1960年代に至る国民国家の複雑な歴史の牽引力になった「複数の」思想を解明することに「関心を寄せている」と控えめに本書の意図を述べている。「複数の」思想とは何なのか。第二部「アメリカの世紀という思想」を読むと、その「複数の」思想のひとつが「アメリカの世紀」であることがわかる。

これらの著者の著述から、「アメリカの世紀」を「歴史としてみる」ということは、1960年代に出現した多面的な社会統合に特徴付けられるアメリカの国民国家の形成の経緯、換言すれば、「アメリカの世紀」とよばれる20世紀の特定の時期の変化をみることであるとわかる。ここで確認されるのは、歴史は過去の事象ないし問題だけでなく、時期的な変化を意味するということである。こう考えると、本書の題名は、「歴史」の持つ変化の意味を踏まえた上で、「アメリカの世紀」が過去の固定化された事象ではなく歴史的流動性をもつものであると示唆していることがわかる。

次に、本書の主題「アメリカの世紀」について考えることにする。このことばは、普通、世界の強国として登場したアメリカがその影響力をおよぼして世界を動かすようになった（あるいは動かすべきと考えられた）時代である20世紀、あるいは20世紀の特定の時期を指して、第二次世界大戦中から戦後にかけて盛んに使われた。しかしより広く、「アメリカの世紀」の概念は、アメリカが世界中の国々のモデルとなるべく理想を掲げた建国の時代からあったし、20世紀が終わりに近づくときアメリカの将来を考える議論のなかで「アメリカの世紀」の語句が復活し、流行語の感さえあった。そして、21世紀に入った現在、グローバル化が進展した世界におけるアメリカの地位を論じる際にこのことばが援用されることが少なくない。<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Alan Brinkley, "The Concept of an American Century," in *The American Century in Europe*, ed. R. Laurence Moore and Maurizio Vaudagna (Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 2003), 7-8.

周知のように、「アメリカの世紀」の概念とそのことばを広めたのは、『ライフ』、『タイム』などの雑誌の創刊者・編集者ヘンリー・ルースだった。「アメリカが、世界において支配的国家となった最初の世紀という意味で、この世紀はアメリカの世紀なのである」「20世紀という時代は、決定的にアメリカの世紀でなければならないのである」(pp. 97, 98)と、ルースは自ら主幹する『ライフ』誌1941年2月17日号に論説「アメリカの世紀」を書き、主張した。著者は本書第二部「アメリカの世紀という思想——第二次世界大戦から冷戦へ」を構成する、第3章「パワーポリティックスと『豊かな社会』の論理」において、この論説及びそれをめぐる論議を分析し、その構造を解明する。

著者の議論をまとめれば、「アメリカの世紀」は基本的にはアメリカの政治的経済的世界制覇を主張する覇権的思想であるが、ルースはそれを文化・社会の多面的な要素を加えた思想として提示し、国民向けに世界におけるアメリカの積極的関与を正当化したということになる。ルースの論説は大きな社会的反響を呼び起こしたが、その理由が、論説の掲載場所がアメリカ的生活様式を示す消費材の広告や写真、記事を満載した『ライフ』誌だったことだと著者は指摘している。ルースの論説の目的は、ヨーロッパやアジアに戦禍が広がっていた時、国民のアメリカ参戦支持を得ることにあったが、そのためにルースは、「硬めの参戦支持の議論」を「文化的に仕立てて展開した」のであり、「この論説が歴史的に独特の特質を持つゆえんは、その点にあった」(p.103)と、著者は述べる。ルースは、アメリカ製の機械、ジャズやハリウッド映画までもあげてアメリカ的生活様式が世界の至る所で受け入れられていることを示し、アメリカの豊かな物質文明は自由、機会の平等を掲げるアメリカの理念によって可能とされるとしたのであるが、著者は、ルースを「民主主義とアメリカ社会の優越性をなにより『豊かさ』によって説明する思想の代表的論客」(p.104)とみている。

この民主主義、自由とアメリカの豊かさを一体化する考え方は、アメリカの伝統でもあり、最近では、9・11のワールド・トレード・センター爆破に際して、ブッシュ大統領が「今朝、アメリカの自由が攻撃されました」と国民に訴えたことが想起される。建物という代わりに「自由」が破壊されたと言ったことは、資本主義の先端を行くアメリカ物質文明と自由とが、少なくとも支配層のなかでは密接に結びついた理念となっていることを示していると言えるのだろう。ルースは「アメリカの世紀」を唱えたとき、この理念を用いてアメリカの参戦を正当化したのだった。

ルースの主張は保守派のそれであり、当然リベラル左派などから厳しい批判を受けた。それらの批判の中で著者は、政治思想家マックス・ラーナーと『ネーション』誌の主幹フリーダ・カーチウェイの二人の論評を取り上げて、次のようにまとめている。ラーナーは『ニュー・リパブリック』4月7日号に“The People’s Century”と題する記事を寄せ、ルースの「アメリカの世紀」は「アメリカ資本主義の代弁者による、世界大の帝国主義の野心が露出している」と批判した。また、カーチウェイは『ネーション』誌3月1日号などで、この戦争が「組織された労働者」たちの「社会的生存をかけた、革新のための戦い」であることを指摘し、ルースがファシズムと戦うために「国内対立の停止」を説くのは、「ファシズムとは異なる形の、新しい『帝国主義』の論理に他ならない」と述べたのだった (pp. 108-109)。

ルースの「アメリカの世紀」が出た後も参戦論がアメリカ国民多数の支持を得たわけ

ではなく、論壇では参戦をめぐって議論が白熱化していた。例えば、『アメリカ政治学社会科学アカデミー年報』(*The Annals of the American Academy of Political and Social Science*)では、「日本とアメリカ」(1941年5月)「アメリカの将来を守る」(1941年7月)などの特集において、政界、学界など各界の論者が戦争・平和両論を展開している。そのなかで、平和論を展開し、ルースの「アメリカの世紀」との対極を示したのが前年社会党から大統領に立候補したノーマン・トーマスだった。トーマスは、国家が民主主義の擁護を目的とした戦争をすることはあり得ないとし、戦争の目的は独立、権力、利益、帝国の獲得であるということを前提に、民主主義を守るためには平和を維持しなければならないと主張した。トーマスは、また、自分たちは明日はどのようなかわからない身だという恐怖心がアメリカ人の間に煽られているが、最近はその恐怖心に加えて「アメリカ帝国主義」がラジオなどで唱えられ、これらが人々を戦争へと駆りたてると警告する。そして、「アメリカ帝国主義」は「美しく輝かしいことばの衣に覆われて」おり、そのことばとは「ヘンリー・ルースの『アメリカの世紀』」であると言う。さらに、「こうしたことばは裸の帝國的野心に言語の衣を着せているだけだ」とし、民主主義はその土地の大衆の手に掛かっているのだと訴える。<sup>2)</sup> 戦争突入を控えた時期における愛国的好戦的なルースの「アメリカの世紀」は、掲載誌やルース自身の地位による社会的影響力から、ややもすると、国民の圧倒的支持を得ていたかのように受け取られがちである。しかし、著者も上記のラーナーなどリベラル左派の論調を通して示しているように、様々な議論の一つであったことに留意しなければならないだろう。

以上、ルースの「アメリカの世紀」を、著者とともに、同時代の議論のなかで相対化してみたが、次に著者が規定する時期的範囲について検討したい。著者は、第一次世界大戦から1970年代半ばに至りアメリカが世界の経済、政治、軍事において絶大な影響を持った時代、つまり実態をともなう一つの時代の概念として捉え、この時期を「アメリカの世紀」とする。そして、ベトナム戦争の終結が「アメリカの世紀」の終焉を意味していたと考え、第6章「20世紀アメリカ史から20世紀世界史へ——ベトナム戦争とその後」で本書を終わっている。ここでは、アジアに民族主義的国民国家を成立させたベトナム戦争は、植民地体制を打ち破り、冷戦的世界構造を弛緩させ、国民国家を形成していく新しい政治空間を作り出した点に大きな意味があり、また、戦争によるアメリカの衰退が世界の多極化をもたらしたことを詳細に議論している。特に、ベトナム戦争を大きく地球規模で捉え、20世紀世界史の中に位置づけるところに著者ならではの壮大な歴史観が現れている。

しかし、「アメリカの世紀」は1970年代半ばに終わったのだろうか。著者は世界の地域化、多元化が進み、アメリカの影響力が絶対的ではなくなったことをあげる。しかし、冷戦後の1980年代末から90年代におけるニューエコノミー展開の中でのアメリカ経済の復活も指摘する。結局、著者によれば、この時代に「現出した世界的な新状況とは、政治的・文化的な意味での世界の多元化、地域化が顕著に進む一方で、軍事的には20世紀の

<sup>2)</sup> Norman Thomas, "How to Fight for Democracy," *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 216, *Defending America's Future* (July 1941), 58-59.

超大国アメリカがその力を外見的には増し、アメリカを中心の一とする自由主義的世界経済が地球規模でその浸透力を再び拡大する状況であった」(pp. 282-83)ということになる。これは、世界におけるアメリカの力の衰えということになるのだろうか。

ベトナム戦争の終結を「アメリカの世紀」の終わりとするのは、著者が「アメリカの世紀」を考える際、アメリカの軍事的、政治的、経済的な支配権に主眼を置いているからであろう。しかし、「アメリカの世紀」は、覇権主義を覆い隠す自由と平等の民主主義の理念、その理念の優越性を証拠づけるアメリカ的生活様式を誇示するところに特徴があるのではないだろうか。実際、著者もルースの「アメリカの世紀」を解説する第3章では、アメリカ文化の影響力を強調している。このことから考えると、「アメリカの世紀」が70年代で終わったとするのは難しいように思える。80年代以後急速に進んだグローバリゼーションは、経済的、文化的影響力から見るとアメリカニゼーションと同意義だとの議論さえある。また、昨年3月の『タイム』誌には、「次のアメリカの世紀」という題で、世界におけるアメリカの影響力は以前にも増して大きくなっていると論じる記事も出ている。21世紀は第二のアメリカの世紀だというのが記事の趣旨であるが、その根拠として経済力、軍事力もあげるが、特に強調するのは文化的側面である。例えば、ナイジェリア、スウェーデン、韓国、アルゼンチンのティーンエージャーはアメリカ文化を共有することでひとつのコミュニティをつくっているとし、文化の具体的内容として「音楽、ハリウッドの見世物、電子ゲーム、グーグル、アメリカの消費ブランド」をあげている。ここでは、中国がいかにかにアメリカ文化——技術、学問を含めた——を受容しているかも書いてある。そして、「アメリカ以外の世界がますます我々のようになってきている」ということは、人々がアメリカの世紀に生きていることを裏付けるものであるというのである。<sup>3)</sup>

「アメリカの世紀」は、著者が主として問題にしている思想とこの『タイム』誌が示す現実の両面から考える必要があるだろう。アメリカの理念を掲げてアメリカの軍事的、政治的、経済的な世界制覇を主張する覇権主義的な、思想としての「アメリカの世紀」はアメリカ例外主義を支柱に成立していたと言えるが、アメリカ例外主義はベトナム戦争以後、国民のコンセンサスではなくなった。その意味では、1970年代半ばを「アメリカの世紀」終焉の時期とすることもできるだろう。しかし、現実を見ると、『タイム』誌が示すように、例外主義衰退後もアメリカの影響力は文化の力——企業に推進された力——に牽引されて拡大し続けており、21世紀の現在も「アメリカの世紀」が続いていることを認めざるを得ないのかもしれない。

以上、本書のテーマに関わる私のコメントおよび疑問を述べた。著者の意図は、前述したように、60年代に至って多面的に統合されたアメリカの国民国家形成の過程を明らかにすることであるが、それを3つの視座、すなわち第一点は社会統制、第二は政府による暴力的権利行使に対する批判勢力あるいは思想、第三は国民統合原理の視点から議論する。取り上げる時期は、第一次世界大戦期ならびに第二次世界大戦前後から冷戦期、つまり著者が「アメリカの世紀」と見る時代であり、第一部「自由の危機と国家変革——第一

<sup>3)</sup> Andres Martinez, "The Next American Century," *Time*, March 22, 2010 ([http://www.time.com/time/specials/packages/article/0,28804,1971133\\_1971110\\_1971104,00.html](http://www.time.com/time/specials/packages/article/0,28804,1971133_1971110_1971104,00.html): accessed December 27, 2010).

次世界大戦前後」、第二部「アメリカの世紀という思想——第二次世界大戦から冷戦へ」、第三部「歴史の終わりと始まり——市民権運動から1980年代へ」の三部構成になっている。本書は、序章「ユージン・ヴィクター・デブズの訴追——戦時下における一社会主義者の行動の軌跡」で始まるが、第一次世界大戦期を20世紀アメリカ史の起点として見る著者の史観を反映している。ここでは、第一次世界大戦期に反政府的言論活動を行った社会主義運動指導者デブズの逮捕、実刑判決を取り上げ、政府の暴力的権力行使に対する批判的な行動・思想のあり方、そして連邦政府権力の拡大を具体的に描き出している。そして著者は、20世紀アメリカ史の始まりを、連邦政府が政治的、社会的に強力な規制力を持ち、国民生活に大きな影響を与えるようになった第一次世界大戦期とする。第一部は第1章「革新主義者と大戦」、第2章「世界分割の時代を超えて——新たな世界構想の胎動」からなる。第1章では、革新主義者の戦時体制に対する多様な反応を国内の革新主義改革と関連づけ、これがニューディール改革につながる基盤になったことを示唆し、興味深い議論の展開となっている。第2章では、第一次世界大戦期にウィルソン大統領が語った世界における民主主義拡大の論理が、移民や労働者を取り込む、戦時体制に向けての国民的統合の意味をもってたと論じるが、説得力がある。第二部は第3章「パワー・ポリティックスと『豊かな社会』の論理」、第4章「挫折した『戦後平和』への期待」を収録する。第3章については「アメリカの世紀」の意味に関連して既に述べたが、本章は、後半でルースの「アメリカの世紀」論が持つ社会編成論的性格と対外政策論的政策のうち、後者に焦点を当て、この覇権論としての展開を論じる。その際、封じ込め政策を立案したジョージ・ケナンにも影響を与えたと言われるニコラス・スパイクマンの権力政治的勢力均衡論に基づく地政学的戦略構想に注目し、詳細に検討している。第4章は、「冷戦の平和」が浸透するアメリカ国内の保守反共勢力による進歩派の弾圧に見られた政治的ダイナミズムを解明する。第三部「歴史の終わりと始まり——市民権運動から1980年代へ」は第5章「黒人シカゴ市長の誕生——1980年代大都市政治の一軌跡」、第6章「20世紀アメリカ史から20世紀世界史へ——ベトナム戦争とその後」からなる。第5章は、公民権運動の新しい展開である黒人市長の登場を取り上げ、マイノリティを含めた国民統合のあり方、下からの統合の運動を考察する。著者は、これを「『アメリカの世紀』としては「明らかな転機を迎えた時代」の統合とみる。第6章で、著者はベトナム戦争の意味を、「20世紀後半の国際政治・思想秩序であった冷戦の枠で、その規律に沿って行われた戦争であり、それとアジアにおける半植民地運動、民族解放を目指す国民国家形成の闘いとが重なった」と総括し、さらにより大きな世界史の展開へと目を向ける。

第6章で、著者は最後に「アメリカの世紀」について、「その終末で世界規模の国民国家の構造と、世界の多元化をもたらした」と、同時に、「自由主義とされる資本主義の潮流」が「巨大な規模でその活動を拡大する方向に向かった」と指摘し、その潮流に国民国家が「歴史の新たなうねりのなかで」どう関わっていくのかと、未来への関心を提示して終わっている。